

# 聖者が暮らす集落で祈る

吉田早悠里 よしださゆり / 南山大学

アルファキーの実子の1人である聖者アブドゥルカリームが暮らすトリ集落。人々は、森林のなかに閉ざされた辺境の地ともいえる同地で、世界の安寧を願って祈る。

## トリ集落

エチオピアのオロミア州ジンマ県ゲラ郡は、豊かな森林に覆われた地域である。ゲラ郡のなかでも周縁部に位置するトリ集落に、ムスリム聖者アルファキー・アフマド・ウマルの実子の1人である聖者アブドゥルカリームが暮らしている。トリは、電気や水道、ガス、携帯電話のネットワークはなく、交通の便も極めて悪いため、辺境の地といっても過言ではない。

トリ集落は、アルファキーが1940年代に拓いた集落である。トリとその近隣村では、実はアルファキーがそれよりも約30年前に貧しい男の姿で同地を訪れていたと伝えられている。当時、一人の男がゲラを訪れ、その地の領主にハルワ（観想修行）のための土地を求めているといった。領主

が息子たちに土地を案内させると、その男は現在のトリの地を選び、どこかへ去ってしまった。それから年月が経ち、エチオピア各地で聖者として知られるようになったアルファキーがゲラを訪れると、かつてアルファキーを案内した領主の息子らも参詣した。するとアルファキーは領主の息子らに対して、かつて分けてもらった土地の代金を支払うと言って、自らがあの時の男であったことを明かしたのだという。

40ヘクタールの広さをもつトリは、かつてはコルカという名前で、そこには誰も住んでいなかった。アルファキーは、オロモ語で「適した」を意味するトリと名付けた。アルファキーと共にゲラを訪れた人々のなかには、ゲラに残ることになった者もいた。アルファキーは、人々をトリと隣接する地に住ませ、トリを拓いてマサラ（邸宅）を造らせた。アルファキーは、実子の養育と集落の維持・管理を弟子のシェ・アフマドに託し、ゲラを去った。そして、アルファキーはメッカ巡礼の後でヤアに行き、没する。

## アルファキーとアブドゥルカリーム

アルファキーは、各地で領主の娘と結婚し、10人以上の実子をもうけた。これらの実子のうち、アルファキーは晩年に得たアブドゥルカリームが自身を上回る霊力を

備えていると繰り返し語っている。

アブドゥルカリームは、エチオピア西部に位置するクサイエで生まれた。アルファキーの妻がアブドゥルカリームを懐妊したのは、アルファキーが人々との面会を断って9か月のハルワ修行に入った時であった。この妻は、アルファキーと肉体的な関係をもつことなく、アブドゥルカリームを身籠ったとされる。アブドゥルカリームが母胎にいた時、礼拝の時間になると母親の胎内からスーフィー教団のひとつであるティジャーニーヤの主要な唱句であるサラート・アルファーティフが聞こえてきた。アブドゥルカリームは、出生時に歯が生え、髪も髭もある老人のような顔つきで生まれたと伝えられている。アルファキーが「急ぐのはやめよ」といってアブドゥルカリームの顔を手でなでると、歯や髭がなくなり、普通の赤子の顔になったという。

アブドゥルカリームは、幼くしてゲラに呼び寄せられた。その後、アブドゥルカリームの母も呼び寄せられて、同腹の弟アブドゥルハリム、妹カディジャが生まれた。アブドゥルカリーム、アブドゥルハリム、カディジャの3人は、トリで育てられた。しかし、アブドゥルハリムとカディジャは死去し、現在、アルファキーの実子で存命している男性はアブドゥルカリームのみである。

## 変貌するトリ集落

トリは、アルファキーの命を受けたシェ・アフマドによって管理された。アルファキーの実子3人は、厳重に柵で囲われたマサラのなかで、人目にふれることなく養育された。

トリには、アルファキーを敬愛する52世帯の人々が暮らした。居住者には、住居と農地のほか、時には衣類や食料も与えられた。トリの土地は、あくまでアルファキーが人々に寄託した土地であり、私有化

木の下で行われる集団での祈禱。



祈禱の合間の一休み。バナナやパンを食べてくつろぐ。



筆者がアルファキーの写真をあげると、青年はひとりになって胸元に写真を抱いて黙した。





集団祈禱に加わって  
祈る女性たち。



アブドゥルカリームの従者、参詣者との記念撮影。



アブドゥルカリームに拝謁し、感極まる参詣者。

することは認められなかった。その土地での収穫物のうち、半分はマサラに納めることが義務づけられ、残りの半分は自家消費することが認められていた。また、週2日は集落での労働が課せられ、住民はマサラへの薪の提供、水路の維持、農耕、柵の建設や修繕などに従事した。

トリは閉鎖的な集落であった。トリと他の集落をつなぐ道は限られており、住民と外部者が集落を出入りすることは制限された。住民には、独自の秩序、規則、規律の厳守が課せられ、集落内で問題が発生した場合も、国家の司法によって解決することは認められていなかった。

ところが1974年にデルグ政権になると、トリは大きな変化に直面した。土地の国有化と再分配がはじまり、集落での週2日の労働義務や、マサラへの収穫物の納付の義務は失われた。とりわけ、集住化計画のもとで1987年にトリの土地が接収されて人々に分配されると、アブドゥルカリームとアブドゥルハリムは自らマサラの外へ出て「普通の人」となって住民とともに働いた。

1991年にエチオピア人民革命民主戦線(EPRDF)が率いる政権になると、政治・宗教・経済の自由化が進められるようになった。それによって、トリにプロテスタント

諸派のキリスト教徒や急進派イスラーム復興主義者が訪れるようになるなど、集落を取り巻く状況は再び大きく変わりつつある。他方で、アブドゥルカリームはマサラの外に出ることをやめ、人々との面会も断つようになった。それは、現在も続いている。

### 聖者と祈禱

1960年代中頃、シェ・アミルという名の男性がトリを訪れる。この男性は、アルファキーを敬愛し、墓廟があるヤアに参詣したこともあった。ある日、シェ・アミルの夢にアルファキーが出てきて、アブドゥルカリームのために働くようにと告げたという。シェ・アミルは、犠牲祭の際にトリを訪れ、アブドゥルカリームとアブドゥルハリムに拝謁した。その後、アルファキー、アブドゥルカリーム、アブドゥルハリムを称える宗教的詩歌を創り始めた。

1980年代初頭にシェ・アミルがトリに住み着くと、シェ・アミルが創る宗教的詩歌に惹きつけられた人々が彼ののもとに集うようになった。1990年の犠牲祭の際には、礼拝に訪れた人々の約半数が、シェ・アミルが創った宗教的詩歌を唱和しながらマサラの周りを回った。こうした動きは、デルグ政権が規制していた宗教運動とみなされ、

弾圧の対象ともなった。

しばらくして、アブドゥルカリームも、シェ・アミルが創る宗教的詩歌の意義を認めるようになった。しかし、シェ・アミルが創った宗教的詩歌には、悪態をはじめ、祈禱には相応しくない言葉もあった。そのため、アブドゥルカリームがそうした言葉を取り除いて整え、祈禱句が誕生した。

### 世界に安寧を

毎週、金曜日と土曜日の昼頃に近隣の集落とエチオピアの各地から、老若男女がトリに集う。なかには、海外から訪れる人物もいる。人々は、アブドゥルカリームが植えたという一本の木の下で、約30分にわたって集団で祈禱をあげるために訪れるのである。そこで唱えられるのは、シェ・アミルが創り、アブドゥルカリームが整えた祈禱句である。

この祈禱句は、オロモ語とアラビア語が混ざり合った短いもので、合計61種類ある。人々は、これらの祈禱句を定型のリズムにそって繰り返し唱える。祈禱句は、集団祈禱のほか、儀礼に用いる葉のカート(噛むと覚醒効果を得られる植物)を噛む時、食事の前後、集団労働の時など、日常のあらゆる場面で唱えられる。祈禱に際しては、香が焚かれ、煙と薫香が聖なる空間を創り出す。他方で、子どもたちは遊びながらこの祈禱句を口ずさむ。

現代のエチオピアは、日々、目まぐるしい変貌を遂げている。変化の波は、トリにも押し寄せているが、現在もトリは人々にとって祈りの場であり続けている。そして人々は今日もトリで祈る。アブドゥルカリームがとりなすバラカ(神の恩寵)によって、世界に安寧がもたらされることを願って。

